

今月号には、星をめぐる、幾編かの
エッセイが掲載されている。幼児と共に
夜空を仰ぐ機会は、現実にはさほど多く
ないであろうが、天空に想いを馳せてみ
たい季節が訪れた、ということであろう
か。

星は、船人に行手を示し、旅人の歩み
を支えるものとして、「導きの星」であ
り、希望の象徴であった。ところで同時
に、それは、古来から、凶々しく悪しき
力の代表でもある。悪魔の代名詞「ルシ
フェル」は、明星を意味するラテン語で
あると言うし、わが国の紀記神話にも、
「あまつみか星」という悪しき神の名が
記されている。

星は、闇を切り裂き、またたいて止ま
ぬその光によって、旅人の慰めであり、
導き手でもあるが、すべてが無に帰る夜
の中で、一人その存在を誇示することに
よって、神にそむく者、荒ぶる神でもあ
った。夜目にも鮮かに、遙か彼方からも

望み得るその白い光のゆえに、それは善
悪二様の際立った両義性において、人と
交わりを持ったと言うことになるうか。

然し、私どもは、いつか、その一面を
排除し、自身の願望に引き寄せた片方の
面でのみ、星をとらえ始めているのでは
ないか。すなわち、ある人は、憧れ、導
きなどの望ましい象徴として、また、あ
る人は呪いのしるしとして。

ところで、人間もまた、極めて両義的
な存在である。男性の中に女性が住み、
女性が優れて男性的でもある。優しさと
残酷さは表裏の關係にあり、大胆さと内
気さは分離不能である。子どもと言えど
も、例外ではない。

にもかかわらず、私どもは、とかくそ
の一面を捨象し、片側だけで彼を把握し
たと思ひ込みがちである。一学期も終る
この時期ゆっくりと記録を読み返して、
一人々に想いを潜めるべき時が訪れて
いるのではないだろうか。(本田和子)

幼児の教育 第七十六巻第七号

七月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十二年六月二十五日印刷
昭和五十二年七月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします